

2021.07.16 発行

**「なぜ本を読むのか。」**

2年5組担任

人間は生きていくといろいろと困ったことや悩みを持ちます。そのような時に本を探せば、必ず自分と同じようなことで困っている人や、悩みを持った人を探することができます。そして、その本を読めば自分の困ったこと、悩み事の解決のヒントを見つけることができます。また、人間は一つの生き方しかできませんが、本を読むことで自分と違ったたくさんの生き方、考え方が学べ、広い視野を持つことができます。

大学で西洋哲学を私は学びました。2回生のときに主任教授に「日本人であるあなたが、なぜ、西洋の哲学を学ぶのか、自分としての答えを見つけなさい。」と言われ、西洋哲学を学ぶことが自分にとってどんな意味があるのかと、ずいぶん悩んだことがあります。自分なりに哲学書を読んだり、ドイツ語を一生懸命勉強したり、アルバイトで貯めたお金でドイツに行きましたが答えは出ませんでした。

そうした時にスイスのユング研究所でユング派の心理療法家の資格を取得した河合隼雄が、種々の症例や夢の具体例を取り上げながら不思議な心の深層を解明する『無意識の構造』と、西ドイツ(1949年5月23日～1990年10月2日まで)のBonn(ボン)、Göttingen(ゲッティンゲン)で、中世ドイツ史に関する古文書を読み解き、「賤視・差別の根源は何か。」を研究した阿部謹也の『刑吏の社会史』を読み、日本人が西洋の学問を勉強し、このような研究ができるんだと思い、それなら自分が西洋の哲学を学ぶのも、それなりに意味があるのではないかと思えるようになりました。本を読むことで悩みが完全に解決したわけではありませんが、これからどうしたらよいかと言うヒントを見つけることはできました。

また、半日ぐらい時間をつくって大きな図書館とか大きな書店に行き自分が読みたい本を探してください。ゆっくり探せば必ず見つかるはずです。

**「本の読み方のコツー表現力や思考力にも効果的」**

「登場人物の気持ちになりながら読む(感情移入)」「だれが?なぜ?を考えながら読む。」「どこが大切か考えながら読む。」こうした読み方をしていると「人の気持ちがわかるようになった。」「長い文章が読めるようになった。」「新しいことをすでに知っていることと結び付けて考えるようになり学力が向上した。」というデータがあります。これから本を読むときには、心がけてください。

**読書感想文に向けての推薦書****『ペスト大流行』** 村上 陽一郎 著 岩波新書

14世紀のペスト大流行に焦点を当て、その被害の実態、さらにはそれが当時のヨーロッパの社会経済に及ぼした影響について論じている。新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が社会経済にどんな影響を及ぼしていくのかを考察するうえで資するような知見に溢れている作品です。

**『コロナの時代の僕ら』** パオロ・ジョルダノ 著 飯田亮介 訳 早川書房

トリノ大学で物理学を学び、素粒子物理学のPh.D.(博士)を取得したイタリアのベストセラー作家パオロ・ジョルダノが、新型コロナウイルスの感染が広がり、死者が急激に増えていく中で日々の記録を重ねたエッセイ。「この災いに立ち向かうために、僕らは何をするべきだったのだろう。何をしてはいけなかったのだろう。そして、これから何をしたらよいのだろう。」を問いかけている作品です。

**『海の都の物語』** 上下2巻 塩野 七生 著 中公文庫

検疫は英語で「Quarantine」といい、これはイタリアのヴェネツィア地方の方言である「Quaranten:クワランテーナ」を語源としています。このイタリア語の意味は「40日間」。1347年に世界中でペストが流行した際、この感染症はオリエント（東洋の国々）から来た船が広めているとして、当時のヴェネツィア共和国政府は、船内に感染者がいなかったことを確認するため、ペストの潜伏期間である40日間、疑わしい船をヴェネツィア近くの港外に、強制的に停泊させる法律を作ったという。『海の都の物語』では、このヴェネツィア共和国千年の歴史がスリリングに描かれています。この本を読むとヴェネツィアに行きたくなります。

#### 『14歳からの哲学』池田 晶子 著 トランスビュー

「自分とは誰か」「死ぬということ」「人生の意味とは」「善悪とは何か」などの哲学的諸問題について、自分の頭で考えるきっかけを与えてくれる作品です。

#### 『わたしを離さないで』カズオ・イシグロ 著 土屋 政雄 訳 ハヤカワ epi 文庫

2017年ノーベル文学賞を受賞したカズオ・イシグロによる近未来SFファンタジー。米国では「18歳までに薦めたい大人の本10冊」に選ばれている。ドラマ化されたが、原作を読むと違った印象を感じる作品です。

#### 『ぼくは勉強ができない』山田詠美 著 新潮文庫

学歴重視社会と言われているけれど、人生の価値観なんて人それぞれ。人よりも多く取って成績を上げたいという人もいれば、そんなことにはまるで興味のない人もいる。多数派が正しいとは限らない。それって当たり前？という人におすすめしたい。

#### 『夜のピクニック』恩田陸 著 新潮文庫

甲田貴子が通う高校には、全校生徒が夜を徹して80km歩く伝統行事「歩行祭」が行われている。ある想いを抱いて歩行祭にのぞむ貴子と、その親友たちの一夜を描く青春小説。

80kmという長い距離をひたすら歩くなかで想いをめぐらせたり、学生生活の思い出や将来の夢を語りあったりする高校生たち。あなたも本書を読み「歩行祭」に参加し、自分の今の思いと比較してみてください。

#### 『桐島、部活やめるってよ』朝井リョウ 著 集英社文庫

バレー部のキャプテン・桐島が突然部活をやめた。そのことが、桐島とはまったく関係のないはずのだれかの日常を変えてゆく青春劇。2012年に映画にもなった話題作です。

#### 『なぜ人と人は支え合うのか』渡辺一史著 ちくまプリマー新書

障害者福祉施設の職員が「社会の迷惑になるだけだから」との理由で自分の務める施設の入居者を殺してしまった相模原障害者施設殺傷事件や著者自身の経験を通して、障害や福祉の意味、そして人と社会のあり方を根底から見つめなおす作品です。障害者について考えることは、健常者について考えることであり、同時に、自分自身について考えることになります。

#### 『モードの迷宮』鷺田 清一 著 ちくま学芸文庫

鷺田 清一の「身体論」や「ファッション論」は、大学入試では頻出です。『モードの迷宮』は著者がファッション雑誌に連載したエッセイのまとめです。鷺田 清一は日本でファッションが、語られるようになったきっかけをつくった哲学者です。

#### 『勉強法が変わる本—心理学からのアドバイス』市川伸一著 岩波ジュニア新書

認知心理と教育心理の知見をもとに、高校生に勉強法を提示しています。効果的な勉強法を探している人へ。

#### 『幕が上がる』平田オリザ 著 講談社文庫

地方の高校演劇部を指導することになった教師が部員たちに全国大会を意識させる。高い目標を得た部員たちの恋や勉強よりも演劇ひとすじの日々を描いた作品。

著者である平田オリザは2021年4月に開学した兵庫県豊岡市に本部を置く公立専門職大学である**芸術文化観光専門職大学**の学長を務めている。

**芸術文化観光専門職大学**は演劇を学べる大学としては、日本の公立大学で初。演劇と観光の両方を学べる大学としては、日本の国公立大学で初である。興味のある人はウェブサイトでチェックしてください。